科目名	外科学系（耳鼻咽喉科学・形成外科学）				
科目名（英）					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修するうえで基礎となる人体のしくみと疾患・治療に関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形式	講義：　○	演習：	実習：	実技：	※　主たる方法：○　その他：△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○					鼻・副鼻腔の構造と機能を説明できる
○					耳鼻咽喉科関連の疾患を概説できる
○					顔面や皮膚の成り立ちを理解し説明することができる
○					顔面・皮膚疾患について理解し、説明することができる

テキスト・教材 参考図書

教科書：鳥山稔（編）「言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第2版」医学書院、2007

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	鼻・副鼻腔の解剖、機能	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
2	鼻・副鼻腔の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
3	外耳の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
4	中耳の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
5	内耳の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
6	頭頚部外科の解剖、疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
7	定期試験	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
8	形成外科総論	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
9	口唇裂	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
10	口蓋裂	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
11	頭蓋、顔面の先天異常	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
12	頭頚部外科に伴う障害	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
13	瘢痕とケロイド	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
14	組織移植	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
15	定期試験	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）

評価方法

(1)定期試験（筆記）を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	臨床神経科学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	片伯部　裕次郎
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	医師として病院勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修するうえで臨床神経科学に関する知識、技能、態度を習得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				中枢神経系疾患の病態、診断、治療について説明できる。
○	○				覚醒下脳手術について説明できる。
○	○				脳電気刺激法・脳磁気刺激法を使用した治療法について説明できる。
○	○				基本的な神経学的検査について説明できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:川平 和美 . 神経内科学 第5版(標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野). 医学書院、　中島 雅美. 理学療法士・作業療法士　PT・OT基礎から学ぶ　神経内科学ノート. 医歯薬出版株式会社

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	意識障害の基本、感覚障害	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
2	脳血管障害(脳梗塞、脳出血、くも膜下出血、その他の脳血管障害)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
3	頭部外傷、脳腫瘍	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
4	変性疾患(大脳基底核疾患、運動ニューロン疾患、脊髄小脳変性症、その他の変性疾患)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
5	脱髄疾患、末梢神経障害	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
6	運動ニューロン疾患、筋疾患	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
7	覚醒下脳手術、脳電気刺激法・脳磁気刺激法	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
8	神経学的検査(意識、感覚・知覚、反射、筋力、筋トーヌス、筋委縮、不随意運動、協調運動障害、自律運動障害等)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

(1)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記試験)	○	○				100%

履修上の注意

科目名	臨床医学講座Ⅰ				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾患・ことばの成り立ちに関する知識を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				言語聴覚士の資格に求められる基礎的知識の水準を意識できる。
○	○				小項目分類ごとの過去問題から正しい答えを選択できる。
○	○				小項目分類ごとの過去問題を解説できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:大森孝一ほか「言語聴覚士テキスト第3版」医歯薬出版株式会社、2018
参考図書:国家試験過去問題集

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	耳鼻咽喉科学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
2	形成外科学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
3	臨床神経科学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
4	学習認知心理学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
5	音響学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
6	失語症基礎	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
7	言語発達学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
8	定期試験と解説	定期試験の振り返り学習をすること。(30分)
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

1)定期試験(筆記)を実施する。
成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	呼吸発声発語系医学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	灘吉　享子
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	実務家教員 担当科目	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚士に必要な呼吸機能に関わる、解剖の知識を修得し、そのメカニズムについて結びつけることができる。そして、基本的な意識をもって、呼吸リハビリテーションについて考える基礎をつくる。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				呼吸器系の基本構造と機能が説明できる。
○	○				呼吸器系の疾患の名称を列挙できる。
○	○				呼吸器系の疾患の特徴を概説できる。
○	○				呼吸器系の疾患の特徴を概説できる。
			○	○	授業時に質問ができる。課外学習の取り組みがある。

テキスト・教材 参考図書

教科書:黒澤　一・佐野裕子著　呼吸リハビリテーション　Gakken
熊倉　勇美編集　標準言語聴覚障害学　発声発語障害学　医学書院
参考書:言語聴覚士テキスト　医歯薬出版株式会社

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	呼吸および呼吸リハビリテーションの概要	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
2	呼吸器系を構成する要素(気道系・肺胞系・脈管系)	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
3	呼吸器系を構成する要素(胸郭系と神経系の関係)	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
4	呼吸の仕組み	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
5	発声時の呼吸調節	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
6	呼吸器系の病態	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
7	呼吸器系の病態	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
8	換気機能の指標について(スパイログラム)	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
9	換気機能の指標について(血液ガス)	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
10	呼吸リハビリテーションを行うにあたっての評価	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
11	呼吸リハビリテーションを行うにあたっての評価	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
12	呼吸リハビリテーションを行うにあたっての評価	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
13	呼吸リハビリテーションの手技の実際	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
14	呼吸リハビリテーションの手技の実際	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。
15	気管切開とコミュニケーションの問題／まとめ	これまでの知識を自分なりにまとめ、試験に向けた資料整理を行う。

評価方法

(1)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	◎	◎				70%
小テスト	○	○				15%
宿題・レポート		○		○		10%
質問・取り組み				○	○	5%

履修上の注意

科目名	聴覚系医学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	実務家教員担当科目	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科(昼夜間)　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾病と治療に関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				聴覚器のの構造と機能を説明できる。
○	○				聴覚検査を列挙し、それぞれの概要を説明できる。
○	○				聴覚系の疾患の名称を列挙できる。
○	○				聴覚系の疾患の特徴を概説できる。
			○	○	授業時に質問ができる。課外学習の取り組みがある。

テキスト・教材 参考図書

教科書:森満　保「イラスト耳鼻咽喉科　第4版」文光堂、2012
参考文献:日本言語聴覚医学会「「聴覚検査の実際　第3版」南山堂
言語聴覚士テキスト 言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　医学書院

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	聴覚系リハビリテーション概論	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
2	外耳と中耳の構造と機能	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
3	中耳と内耳の構造と機能	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
4	伝音機構と感音機構のまとめ	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)レポート「音を受容するまでの流れ」(1時
5	平衡機能と他器官の関連	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
6	聴覚系の病態	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
7	基本的な自覚的聴覚検査	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
8	内耳機能検査	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
9	診断的な自覚的聴覚検査・聞こえの評価	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
10	他覚的聴覚検査	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
11	聴覚発達と小児聴覚検査	Classiによる課題 レポート「検査の選択基準」
12	先天性疾患	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
13	後天性疾患	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
14	聴覚のリハビリテーション	授業資料、テキストを基に小テストに向けて学習をする(1時間)Classiによる課題
15	定期試験と解説	誤った問題について振り返り学習をする

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。(4)授業時の質問や取り組み
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	◎	◎				70%
小テスト	○	○				15%
宿題・レポート		○		○		10%
質問・取り組み				○	○	5%

履修上の注意

まとめ課題レポートあり。小テスト評価に含む。

科目名	学習・認知心理学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30	担当者	
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	人間の認知に関与する感覚、知覚、注意、記憶、言語、知識、思考などについて学習する。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	△				感覚・知覚・認知過程の基本概念と主要理論を説明できる
○	△				思考・知識の表象、構造と主要理論を説明できる
○	△				感覚・情動・動機づけの基本概念と主要理論を説明できる
○	△				学習の基本概念と主要理論を説明できる

テキスト・教材 参考図書

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	学習認知心理学の概要～心理学領域内での位置づけ～	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
2	感覚 (感覚の種類、感覚可動範囲と感度、物理量と心理量)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
3	感覚 (感覚モダリティと感覚の統合、順応と対比)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
4	知覚・認知 (色彩感覚、奥行き知覚、図地弁別と形態知覚)	感覚についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
5	知覚・認知 (運動知覚、知覚恒常性、運動協応)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
6	知覚・認知 (認知地図、対人認知、感覚遮断)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
7	学習 (古典的条件づけとオペラント条件づけ)	知覚・認知についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
8	学習 (強化)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
9	学習 (弁別学習、技能学習、社会的学習)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
10	学習 (学習の転移と動機づけ、要求水準)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
11	記憶 (記憶過程、短期記憶と長期記憶)	学習についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
12	記憶 (記憶範囲、記憶容量、忘却)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
13	思考 (問題解決、概念形成と概念の獲得、概念の構造)	記憶についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
14	思考 (象徴、イメージ、スキーマ、推理)	記憶についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
15	定期試験	定期試験対策のまとめを作成すること

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	◎	○				80%
小テスト	◎	◎				10%
レポート	○	◎				10%

履修上の注意

科目名	音響学（聴覚心理学含む）				
科目名（英）					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる言語とコミュニケーションに関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形式	講義：　○	演習：	実習：	実技：	※　主たる方法：○　その他：△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○					音の物理的側面の基本的概念が説明できる
○					言語音の音響的特性を理解し、調音との関係を説明できる
○					音声知覚に関する基本概念と知識を説明できる

テキスト・教材 参考図書

教科書：青木直史「ゼロからはじめる音響学」講談社、2014

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	波の一般的性質	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
2	音の物理的性質：音圧、デシベル	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
3	音の物理的性質：音響パワー、音の強さのレベル、音圧レベル	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
4	音の物理的性質：音の伝搬と距離減衰、ドップラー効果	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
5	音の大きさの知覚	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
6	音の周波数分析：スペクトルとその表現	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
7	音の高さの知覚	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
8	電気音響機器	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
9	アナログとデジタル	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
10	マスキング	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
11	臨界帯域と聴覚フィルタ	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
12	両耳聴	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
13	MLD、先行音効果	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
14	聴覚心理学のまとめと補足	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
15	定期試験	講座全体を振り返り学習をする（1時間）

評価方法

1）定期試験（筆記）を実施する。
成績評価基準は、S（90点以上）・A（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	地域言語聴覚療法				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	永江　信吾
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる社会福祉、リハビリテーションに関する基本的知識を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				地域リハビリテーションの社会的背景と意義を説明できる。
○	○				成人・高齢者の地域生活への支援を説明できる。
○	○				地域包括ケアについて説明できる。
○	○				小児の地域生活への支援を説明できる。
○	○				災害時の対応を説明できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:藤田郁代(監)「標準言語聴覚障害学　地域言語聴覚療法学」医学書院、2019

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	地域リハビリテーションの社会的背景と意義	教科書や配布資料を読み返す(30分)
2	地域言語聴覚療法とは	教科書や配布資料を読み返す(30分)
3	地域言語聴覚療法を支えるシステムと制度	教科書や配布資料を読み返す(30分)
4	地域における連携	教科書や配布資料を読み返す(30分)
5	地域言語聴覚療法の展開	教科書や配布資料を読み返す(30分)
6	地域言語聴覚療法におけるサービス	教科書や配布資料を読み返す(30分)
7	障がい別地域言語聴覚療法　ケースワーク・高次脳機能障害系	教科書や配布資料を読み返す(30分)
8	障がい別地域言語聴覚療法　ケースワーク・運動障害系	教科書や配布資料を読み返す(30分)
9	障がい別地域言語聴覚療法　ケースワーク・その他の疾患	教科書や配布資料を読み返す(30分)
10	発達・教育の支援	教科書や配布資料を読み返す(30分)
11	小児の支援の実際	教科書や配布資料を読み返す(30分)
12	障がい別地域言語聴覚療法　ケースワーク・小児系	教科書や配布資料を読み返す(30分)
13	コミュニケーション機器による支援	教科書や配布資料を読み返す(30分)
14	災害への対応	教科書や配布資料を読み返す(30分)
15	定期試験	講座全体を振り返り、学修する(1時間)

評価方法

(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				80%
小テスト						
宿題・レポート				○		20%
発表・作品						

履修上の注意

科目名	失語・高次脳機能障害の展開総論				
科目名(英)	Deployment of Aphasia and Higher brain dysfunction　General remarks				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	小川　春美
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼間部　1年生				
授業概要	失語症と高次脳機能障害の評価や訓練に関する基礎知識を習得する。 失語症や高次脳機能障害のリハビリテーションにおける職種連携について学ぶ。 失語症や高次脳機能障害関連の文献抄読を通して、言語聴覚療法における訓練・指導・支援や地域社会とのかかわりについて考える。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				失語症と高次脳機能障害の評価の目的や評価の流れについて説明できる。
○	○				失語症と高次脳機能障害の評価の際に収集する情報や検査方法を挙げることができる。
○	○		○		失語症と高次脳機能障害のリハビリテーションについて、関連の文献を検索し、概要を説明できる。
○	○		○		国家試験の問題に取り組み説明することが出来る。

テキスト・教材 参考図書

ﾃｷｽﾄ　藤田郁代　標準言語聴覚障害学　失語症　医学書院　2015、藤田郁代　標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学　医学書院　2015、参考図書　三村將　高次脳機能障害マエストロシリーズ　2　画像の見かた・使いかた　医歯薬出版株式会社　2006、鈴木　孝治高次脳機能障害マエストロシリーズ　3リハビリテーション評価　医歯薬出版株式会社　2006

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	言語聴覚療法の評価の目的と流れ	テキストの該当項を30分読んでおく。
2	失語症　高次脳機能障害の評価の原則	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
3	関連障害の評価や対応法について	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
4	情報収集の種類	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
5	情報収集　観察の方法	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
6	言語面の情報　　スクリーニング検査	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
7	言語面の情報　掘り下げ検査	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 中間期の小テストを実施するので、復習しておく
8	情報収集　医学面　社会面　関連情報について	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
9	情報の統合　評価のまとめ	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
10	問題点の抽出と目標設定	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
11	失語症と高次脳機能障害　言語聴覚療法の理論と技法	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
12	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション　訓練から支援	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 Classiで確認テストを実施するので、復習しておく
13	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション　地域との連携	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。
14	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション　症例検討	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。
15	まとめ	定期試験に向け、資料、テキスト、Classi、小テストの内容を30分確認し、復習しておく

評価方法

(1)授業の中で小テスト1回(中間期)、クラッシ-を10回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト・クラッシー	○	○		○		20%
レポート・発表	○	○		○		10%

履修上の注意

科目名	失語症の理解				
科目名(英)	realization of aphasia				
単位数	1単位	時間数	30時間	担当者	髙津原　直樹
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部1年				
授業概要	・基本的な失語症についての定義、知識を習得する。 ・失語症古典的分類におけるそれぞれの特徴を把握し、鑑別する。 ・言語症状を認知神経心理学的モデルにあてはめて考え、その発現機序を説明する。 ・総合的失語症検査(SLTA)をマニュアルを見ながら実施する。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:　○	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				失語症の定義について説明することができる。
○	○				失語症の古典的タイプ分類ができる。
○	○				失語症と近縁症状との鑑別ができる。
○	○				失語症の各タイプの代表的な特徴を、何も見ずに列挙できる。
		○	○		失語症総合的検査(SLTA)を模擬的に実施できる。

テキスト・教材 参考図書

小嶋　知幸著　なるほど失語症の評価と治療　新興医学出版社　SLTA 標準失語症検査　マニュアル
藤田　郁代著　失語症学第2版　医学書院
大森　孝一、永井千代子著　言語聴覚士テキスト第3版　医歯学出版株式会社

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	失語症の定義 原因疾患、責任病巣	Classiで小テスト『失語症の責任病巣』を実施(5択×3問)。30分
2	失語症の症状①(聴覚的理解) 語音認知障害、単語理解障害、統語理解障害	①語音認知障害②音韻的誤り③意味的誤りについて具体例を挙げレポートを提出。60分
3	失語症の症状②(発話) 喚語障害、錯語、新造語、ジャルゴン、統語障害、再帰性発話、復唱、近縁症状	様々な錯語の違いについて、各1つずつ具体例を挙げたレポートを提出。60分
4	失語症の症状③(読解、音読、書字) 漢字と仮名の違い、錯書、失書	Classiで小テスト『読解、音読、書字』を実施(5択×3問)。30分
5	認知神経心理学的モデルの活用 聴覚的理解、読解	自分が知らない単語を人から教わり、それを聞いて理解できるまでのメカニズムを図式化して提出。60分
6	認知神経心理学的モデルの活用 呼称、語想起、復唱、書字、書取	復唱の4経路を認知神経心理学的モデルにあてはめて解説できるようになっておく。30分
7	失語症の古典的分類とその鑑別点 8つの古典的分類	8つの古典的分類の図表を何も見ないで描いて提出。30分
8	ブローカ失語 ウェルニッケ失語	Classiで小テスト『ブローカ失語、ウェルニッケ失語』を実施(5択×3問)。30分
9	全失語 健忘失語、伝導失語	Classiで小テスト『全失語、健忘失語、伝導失語』を実施(5択×3問)。30分
10	超皮質性失語(感覚性、運動性、混合性)	Classiで小テスト『超皮質性失語』を実施(5択×3問)。30分
11	その他の失語症候群 語義失語、皮質下性失語、原発性進行性失語	Classiで小テスト『その他の失語症候群』を実施(5択×3問)。30分
12	SLTA実技	3週間後にSLTA実技テストを行うため、実技練習をしておくこと。(ランダム1下位検査)120分以上
13	小児失語症の原因疾患、臨床像 総合的失語症検査(SLTA)	SLTAのマニュアルを見て自宅で練習 60分以上
14	純粋型 純粋失読、純粋失書、失読失書、純粋語聾、純粋語唖	SLTAのマニュアルを見て自宅で練習 60分以上
15	SLTA実技テスト	定期試験に向けた勉強をしておくこと。120分以上

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)レポートを2回実施する。 (3)定期試験(筆記・実技)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	○	○				60%
実技テスト	○	○	○			20%
小テスト・レポート	○	○				20%

履修上の注意

SLTA 標準失語症検査　マニュアル

科目名	発達障害・SLIの理解				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	永野　淳子
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	小児施設にて心理担当として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	発達障害(自閉症スペクトラム障害、学習障害、注意欠如/多動性障害)、特異的言語発達障害の基本的概念と知識を習得する。 自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害のそれぞれの関連を学ぶ。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の定義を説明できる
○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の診断基準を説明できる
○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の症状を説明できる
○	○		○		各疾患で言語発達障害が生じる原因と発症メカニズムを推論できる
○	○		○		当事者、家族、関係者の心理を概説できる

テキスト・教材 参考図書

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	発達障害の定義	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
2	発達障害の診断基準(DSM－5、ICD-11)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
3	発達障害の言語領域の症状(語彙・文法、コミュニケーション)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
4	発達障害の言語領域の症状(発声発語、読み書き、認知)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
5	特異的言語発達障害の概要(定義と診断基準)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
6	特異的言語発達障害の言語領域の症状	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
7	当事者、家族、関係者の心理の理解	事例検討資料の作成(60分)
8	定期試験	講座全体を振り返り、試験対策を行う(60分)
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト						
宿題・レポート				○		30%
発表・作品						

履修上の注意

科目名	知的障害の展開				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	45時間	担当者	福島　志津
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	小児施設にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	知的障害児に対する言語聴覚療法の評価診断、および言語治療(指導・支援)に関する知識、技能、態度を習得する。				
授業形式	講義:　○	演習:　○	実習:	実技:　△	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				知的障害児に対する言語治療における言語聴覚士の役割を説明できる
○	○		○		知的障害児に対し、言語聴覚療法の評価診断の基本概念と方法を説明し、模擬的に実施できる

テキスト・教材 参考図書: 石田宏代・石坂郁代/編　言語聴覚士のための言語発達障害学 第2版　(医歯薬出版)2016年

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	知的障害児の評価診断とは	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
2	知的障害児の言語治療(指導・支援)とは	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
3	評価診断(評価診断の原則、手続き、情報収集の方法)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
4	評価診断(認知行動面、環境面の情報収集)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
5	言語面の評価(言語理解・表出、コミュニケーション、スピーチ領域)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
6	言語面の評価(LCスケール)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
7	言語面の評価(LCスケール)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
8	言語面の評価(<S-S>法言語発達遅滞検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
9	言語面の評価(<S-S>法言語発達遅滞検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
10	言語面の評価(絵画語彙発達検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
11	言語面の評価(質問－応答関係検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
12	言語面の評価(ITPA言語学習能力診断検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
13	心理検査(WPPSI知能検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
14	心理検査(WISC-Ⅳ知能検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
15	心理検査(KABC－Ⅱ)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
16	心理検査(KABC－Ⅱ)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
17	心理検査(田中ビネーⅤ)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
18	心理検査(新版K式発達検査)	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
19	言語評価、心理検査のまとめ	クラッシーで振り返り課題を実施 小テスト対策(30分)
20	ケーススタディ　(模擬症例の情報収集、評価方法の立案)	グループワークで情報収集、評価計画を話し合う 検査練習(30分)
21	ケーススタディ　(模擬症例の評価演習)	検査練習(30分)
22	ケーススタディ　(模擬症例の評価結果のまとめ)	結果のまとめ作成(30分)
23	定期試験	講座全体を振り返り、試験対策を行う。(60分)

評価方法

(1)レポートを数回実施する。(2)小テストを5回実施する。(3)模擬症例のレポート作成。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	◎	◎				70%
小テスト	○	◎				15%
宿題・レポート		◎		○		15%

履修上の注意

科目名	機能性構音障害の理解と展開				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	今村　亜子
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	実務家教員 担当科目	施設にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科昼夜間部　1年				
授業概要	機能性構音障害の基礎知識、構音検査の実施と分析方法を習得する、系統的構音訓練 の枠組みを知り立案・実施・評価を実践できる力を身につける。関連分野の理論的背 景、エビデンスに基づく臨床思考を身につける。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				過去の履修した音声学の知識を構音障害臨床との関連について説明できる。
○	○				機能性構音障害の定義とその症状について説明することができる。
○	○	○			機能性構音障害に関わる検査を選択することができ遂行することができる。
○	○	○			訓練プログラムの概要を理解し説明することができる。
○	○	○			それぞれの訓練内容におけるPLAN・DO・SEEの過程を実行することができる。

テキスト・教材 参考図書

音声表記・音素表記　記号の使い方ハンドブック 標準言語聴覚障害学「発声発語障害学」 医学書院
参考文献:改訂版　機能性構音障害 改訂第3版　聴覚言語療法臨床マニュアル

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	音声学・音韻論と臨床の接点	指定教科書と過去の音声学の教科書および配布プリントを使用し復習をしておく
2	発達途上の小児の構音障害	教科書と配布プリントを使用し復習しておく
3	演習）構音類似運動検査	自主演習をしておく
4	演習）構音検査、結果のまとめと分析	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
5	系統的構音訓練の枠組み	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
6	演習）構音訓練の立案・実施・評価（単音～単音節レベル）	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
7	演習）構音訓練の立案・実施・評価（連続音節レベル①教材の留意点）	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
8	演習）構音訓練の立案・実施・評価（連続音節レベル②実施の留意点）	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
9	演習）構音訓練の立案・実施・評価（単語レベル）	自習演習および配布プリントを使用して復習しておく
10	演習）構音訓練の立案・実施・評価（句・短文レベル）	自主演習および配布プリントを使用して復習しておく
11	演習）構音訓練の立案・実施・評価（句・短文レベル）	自習演習および配布プリントを使用して復習しておく
12	演習）構音訓練の立案・実施・評価（般化アプローチ）	自主演習および配布プリントを使用して復習しておく
13	異常構音への対応	配布プリントを使用して復習しておく
14	音声知覚・音韻処理について	配布プリントを使用して復習しておく
15	まとめ	配布プリントを使用して復習しておく

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)定期試験（筆記）を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験（筆記）	○	○				85%
小テスト	○	○				15%

履修上の注意

科目名	運動障害性構音障害の理解				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	灘吉　享子
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	実務家教員担当科目	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科昼夜間部　1年				
授業概要	1)構音運動のメカニズムについて理解し説明できる。2)構音障害の特徴について理解し、運動障害性構音障害の診断と分類ができる。3)言語聴覚士に必要なふるまいやコミュニケーション態度、学習能力の基礎を築き、個人 の課題を具体的に見つけることができる。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				運動障害性構音障害の発生機序を説明するために、構造と機能を説明することができる。
○	○				運動障害性構音障害の病態について説明できる。構音障害の発現機序を説明できる。
	○				運動障害性構音障害について、一般情報収集から問診および検査について説明できる。
			○		言語聴覚士としてのふるまいについてイメージをもち、態度に反映することができる。
			○	○	授業において疑問に思うことができ、問題解決のために質問に結びつけることができる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:ディサースリア臨床標準テキスト　西尾　正輝著／インテルナ出版
運動障害性構音障害学　廣瀬　肇　他　著／医歯薬出版株式会社

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	構音障害の概念と分類／運動障害性構音障害とは	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む
2	運動系の基礎理解(運動系の概要・錐体路・錐体外路)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む
3	運動系の基礎理解(小脳系・下位運動ニューロン・筋系)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む
4	運動系の基礎理解(発声発語器官の構造および筋肉の働き)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む
5	運動系の障害(錐体路・錐体外路)とその症状	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／インターネット等を利用し症状を画像的に確
6	運動系の障害(小脳系)とその症状	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／インターネット等を利用し症状を画像的に確
7	運動系の障害(下位運動ニューロン)とその症状	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／インターネット等を利用し症状を画像的に確
8	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(弛緩性・混合性)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施
9	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(UUMN・痙性)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施
10	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(失調性)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施
11	運動障害性構音障害のタイプと原因疾患・発話特徴(運動低下性)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／サンプルCDの聴取実施
12	運動障害性構音障害の評価(概要・言語病理学的診断)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む
13	運動障害性構音障害の評価(問診・観察を通しての理解)	教科書および講義資料について復習し、小テストに取り組む／画像観察から読み取れることレポート
14	失語症補助テスト	実技演習に取り組む
15	失語症補助テスト／まとめ	実技演習に取り組む

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	○	○				70%
小テスト	○					10%
宿題・レポート	○	○				20%

履修上の注意

科目名	小児聴覚障害の診断				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	井上　康子
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	聴覚障害および関連障害に関する基本的概念と知識を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:　○	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○					コミュニケーションモードについて説明できる
○					発達段階に応じた聴覚検査を選択できる
○					聴覚検査の手順を説明できる
○					本人・家族に評価結果を説明する方法を示すことができる
○					模擬ケースカンファレンスで報告する内容を示し、模擬的に報告できる

テキスト・教材 参考図書

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	聴覚障害児をめぐる社会的文化的背景や医療福祉教育の歴史	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
2	コミュニケーションモード	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
3	乳幼児聴覚検査	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
4	聴覚評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
5	言語発達評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
6	コミュニケーション発達評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
7	認知、社会性、情緒評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
8	面接評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
9	評価演習	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
10	情報の分析、統合、解釈	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
11	聴覚保証機器の適応と訓練の適応	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
12	評価サマリの作成	評価サマリを作成する(1時間)
13	統合と分析、治療計画の作成	治療計画を作成する(1時間)
14	ケースカンファレンス	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
15	定期試験と振り返り	講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)

評価方法

(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト						
宿題・レポート				○		30%
発表・作品						

履修上の注意

科目名	リハビリテーション医学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	飯塚病院医師および専任教員
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	医師及び療法士として病院勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	リハビリテーション医療の役割について理解し、その構造を把握する。 また、リハビリテーション医学における関係職種の役割について把握し、チームアプローチの重要性を理解する。				
授業形式	講義:	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				リハビリテーションの歴史について説明できる。
○	○				リハビリテーションの理念と対象について分類でき説明できる。
○	○				リハビリテーション関係職種の役割について把握し説明できる。
○	○				救命医学の基本概念が説明できる。
○	○	○			基本的救命措置が実施できる。

テキスト・教材 参考図書

参考図書:言語聴覚士テキスト

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	リハビリテーション医学の成り立ち	授業資料を基に復習する
2	リハビリテーションの理念と対象	授業資料を基に復習する
3	診断と評価　各種疾患の臨床	授業資料を基に復習する
4	リハビリテーション医学とリハビリテーションの全体像	授業資料を基に復習する
5	チームアプローチの実際	授業資料を基に復習する
6	リハビリテーションチーム　PT概論	授業資料を基に復習する
7	リハビリテーションチーム　OT概論	授業資料を基に復習する
8	救急救命の実際	授業資料を基に復習する

評価方法

以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	◎	◎				35%
実技			○			20%
宿題・レポート		○		○		40%
質問・取り組み				○	○	5%

履修上の注意

科目名	臨床医学講座Ⅱ				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾患・ことばの成り立ちに関する知識を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				言語聴覚士の資格に求められる基礎的知識の水準を意識できる。
○	○				小項目分類ごとの過去問題から正しい答えを選択できる。
○	○				小項目分類ごとの過去問題を解説できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:大森孝一ほか「言語聴覚士テキスト第3版」医歯薬出版株式会社、2018
参考図書:国家試験過去問題集

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	リハビリテーション医学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
2	内科学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
3	小児科学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
4	高次脳機能障害学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
5	聴覚系医学総論	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
6	聴覚心理学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
7	言語学	事前に言語聴覚士テキストの該当部分を読み、わからないところをチェックしておく(1時間)
8	定期試験と解説	定期試験の振り返り学習をすること。(30分)
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

1)定期試験(筆記)を実施する。
成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	言語聴覚臨床の評価診断				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	星子　隆裕・永江信吾
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	言語聴覚療法の評価診断の基本的概念・技能・態度を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				言語聴覚療法の評価診断における基本的概念を説明できる。
	○	○			コミュニケーション行動を観察する視点を説明できる。
○	○				評価診断結果をサマリにまとめる枠組みを説明できる。
○	○				言語聴覚障害を総合的に評価し鑑別診断する方法を説明できる。
	○	○			言語聴覚療法を総合的に評価し鑑別診断する方法を模擬的に実施できる。

テキスト・教材 参考図書

なし

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	初回面接において情報を得るための3つのコツ	3つのコツを用いて演習を3名の方と行い、感想を記録する。(30分)
2	測定と観察法はどちらが優れているのか	信頼性と妥当性について調べる(30分)
3	実践　観察法	観察レポートを記載する(40分)
4	スクリーニング検査の構成	スクリーニング検査の項目が何を測定しようとしているのかをまとめる(30分)
5	STADの構成	STADの手順を学習する(30分)
6	実践　STAD	OSCEに向けて練習をする。(60分)
7	評価の目的を再確認する	授業資料を振り返り学習をする(30分)
8	バイタルサインの測定	OSCEに向けて練習をする。(30分)
9	成人分野のサマリの作り方	授業資料を振り返り学習をする(30分)
10	小児分野のサマリの作り方	授業資料を振り返り学習をする(30分)
11	ADLの評価法	授業資料を振り返り学習をする(30分)
12	QOLやその他の評価法	授業資料を振り返り学習をする(30分)
13	理学療法の評価法	授業資料を振り返り学習をする(30分)
14	作業療法の評価法	授業資料を振り返り学習をする(30分)
15	OSCE	評価を基に練習をする(30分)

評価方法

(1)OSCEを実施する。(2)レポートを3回実施する。
以下を下記の観点・割合にて評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験						
小テスト						
宿題・レポート	○	○				40%
発表・作品						
OSCE		○	○			60%

履修上の注意

科目名	高次脳機能障害の理解				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	東納　嘉寛
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	高次脳機能障害の基本的概念と知識を修得し検査を実施できる。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				高次脳機能障害の評価診断の基本概念と方法を説明し、模擬的に検査を実施できる。
○	○				言語聴覚療法の評価診断の手続きを説明できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:原 寛美 . 高次脳機能障害ポケットマニュアル　第3版　. 医歯薬出版株式会社、

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	評価の流れ　　原則・手続き・情報収集・鑑別診断とは	授業の復習を30分行う。
2	脳画像検査 基本	授業の復習を30分行う。
3	高次脳機能障害の検査　各論　コース立方体組み合わせテスト	授業の復習を30分行う。
4	高次脳機能障害の検査　各論　レーヴン色彩マトリックス検査	授業の復習を30分行う。
5	高次脳機能障害の検査　各論　　HDS-R、	授業の復習を30分行う。
6	高次脳機能障害の検査　各論　　MMSE-J、CDR	授業の復習を30分行う。
7	高次脳機能障害の検査　各論　COGNISTAT 認知機能検査,MoCA-J軽度認知障害スクリーニング等	授業の復習を30分行う。
8	高次脳機能障害の検査　各論　　記憶機能検査(S-PA、三宅式記銘検査)	授業の復習を30分行う。
9	高次脳機能障害の検査　各論　　記憶機能検査(S-PA、三宅式記銘検査、WMS-R、リバーミード行動記憶検査、等)	授業の復習を30分行う。
10	高次脳機能障害の検査　各論　　記憶機能検査(WMS-R、)	授業の復習を30分行う。
11	高次脳機能障害の検査　各論　　記憶機能検査(リバーミード行動記憶検査、等)	授業の復習を30分行う。
12	高次脳機能障害の検査　各論　　注意機能検査の検査(TMT-J、BIT)	授業の復習を30分行う。
13	高次脳機能障害の検査　各論　　注意機能検査の検査(BIT　)	授業の復習を30分行う。
14	高次脳機能障害の検査　各論　　注意機能検査の検査(CAT)	授業の復習を30分行う。
15	高次脳機能障害の検査　各論　　注意機能検査の検査(CAT等　)	授業の復習を30分行う。

評価方法

成績処理方法:定期試験(筆記実技)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	運動障害性構音障害の展開				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	灘吉　享子
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	実務家教員 担当科目	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科昼夜間部　1年				
授業概要	①運動障害性構音障害についての基礎的な知識を理解するとともに、その知識を診 断・治療に生かしていくことできる。②専門家として必要な態度について理解し、実行することができる。 ③能動的に授業参加することができ、積極性をもって遂行することができる。				
授業形式	講義:　△	演習:	実習:	実技:　○	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				運動障害性構音障害のタイプごとの発生機序および症状について説明できる。
○	○	○	○		運動障害性構音障害における検査についてマニュアルを使用せず実行することができる。
○	○				検査結果をもとに発生機序の仮説を立てながら診断することができる。
○	○				それぞれ症状について発生機序にあわせた訓練立案ができる。
○	○	○			訓練手技について目的を説明することができ、遂行することができる。

テキスト・教材 参考図書

西尾正輝著ディサースリア臨床標準テキスト　医歯薬出版株式会社
廣瀬　肇ら著運動障害性構音障害学　医歯薬株式会社
西尾　正輝　著ディサースリア検査　インテルナ出版

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	講義概要、演習の進め方について　タイプごとの病態特徴と重症度のまとめ	該当する教科書の内容をもとに前期内容の振り返りをしておく
2	言語病理学的鑑別診断・問診・スクリーニングテスト	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
3	ディサースリアの臨床で行う標準的検査の概要(説明) 構音検査(実技演習)	自主演習をしておく
4	標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)発話の検査・呼吸機能 標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)発声機能・鼻咽腔閉鎖機	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
5	標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)口腔構音機能 標準ディサースリア検査結果の解釈の仕方(実技演習)口腔構音機能	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
6	運動障害性構音障害の評価、検査結果のまとめ方	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
7	検査実技テスト:2人一組にて、テスト概要については事前に説明します。	テストの振り返りをもとに自主演習をしておく
8	症例を通して検査演習(結果から症状を検出する)	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
9	問題点の抽出および訓練立案について(グループにわかれ担当症例について)	グループごとに内容を深めておく
10	運動障害性構音障害の訓練法(発声発語器官運動へのアプローチ)	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
11	運動障害性構音障害の訓練法(発声発語へのアプローチ)	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
12	運動障害性構音障害の訓練法(タイプごとのアプローチ)	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
13	運動障害性構音障害の訓練法(訓練の立案と実施)	教科書および配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
14	訓練実技テスト・症例レポートの考察課題①	実技テストを振り返り自主演習をしておく 考察内容を振り返り内容を深める
15	症例レポート考察課題②・まとめ	考察内容を振り返り内容を深める

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記・実技)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	○	○				50%
実技テスト	○	○	○			30%
小テスト・レポート	○	○				10%
レポート	○	○				10%

履修上の注意

科目名	摂食嚥下障害の理解				
科目名(英)	Dysphagia Ⅰ				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	八木　智大
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	実務家教員 担当科目	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部1年				
授業概要	摂食嚥下障害について基本的な概念を学びます。また、摂食嚥下障害によって引き起こされる合併症や関連障害が私たちの生活に与える影響について具体的に想像できるだけの知識を獲得します。嚥下障害や関連障害に対する訓練や支援方法を立案する為に、病態の評価方法や手技を学び演習を通じて技術の獲得を目指します。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:　△	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				摂食嚥下に対するリハビリテーションの目的を説明することができる。
○	○				摂食嚥下に関与する神経、筋を含む構造を説明できる。
○	○				健常人における摂食嚥下モデルを説明することができる。
○		○			摂食嚥下障害に対する基本的な評価技法をクラスメートに実施することができる。
	○		○		自らの考えをグループワークや個別課題の中で表現することができる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:藤島一郎ほか「脳卒中の摂食嚥下障害　第3版　web動画付き」医歯薬出版株式会社 、2017
聖隷嚥下チーム「嚥下障害ポケットマニュアル　第3版」医歯薬出版株式会社、2018

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	嚥下障害総論～「食べる」とは、「食べられない」とはどういうことか考える授業～	教科書の該当部分を復習する(30分)
2	健常者における嚥下器官の構造を観察し、絵をかいて説明できるようになる	教科書の該当部分を復習する。資料を基に嚥下器官の構造を図示できるようになっておく(1時間)
3	嚥下モデルを学ぶ	教科書の該当部分を復習する(30分)
4	嚥下に関わる筋肉について解剖や役割を学ぶ	教科書の該当部分を復習する(30分)
5	嚥下に関わる神経について局在や役割を学ぶ	教科書の該当部分を復習する(30分)
6	摂食嚥下障害の原因と病態を学び列挙することができる。	教科書の該当部分を復習する(30分)
7	脳卒中による嚥下障害を学び病態の特徴を説明できるようになる	教科書の該当部分を復習する。次回の授業に向けて担当項目のレポートをまとめる(1時間)
8	クラスメートに教えよう①　嚥下モデルや神経、筋のレポート作成	教科書の該当部分や個人レポートを参考に、全体に向けた授業作りをグループで完成させる(2時間)
9	クラスメートに教えよう②　レポートを基にクラス全員に授業を行う	クラスメートが作成したレポート、授業を基に復習する(30分)
10	摂食嚥下障害の評価演習　～観察～	教科書の該当部分を復習し、クラスメートと模擬演習を行う(1時間)
11	摂食嚥下障害の評価演習　～簡易検査～	教科書の該当部分を復習し、クラスメートと模擬演習を行う(1時間)
12	摂食嚥下障害の評価　～精密検査～　検査映像から嚥下器官の動きをとらえる	教科書の該当部分を復習し、クラスメートと模擬演習を行う(1時間)
13	合併症と関連障害について知り、嚥下訓練の目的を考える	教科書の該当部分を復習する(30分)
14	模擬症例について考える(グループワーク)	教科書の該当部分を復習する／実技試験に向けた模擬演習を行う(2時間)
15	実技試験 定期試験	教科書の該当部分を復習する(1時間)

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する(3～8回目の授業開始時に前回授業の内容について実施する予定です)。
(2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記・実技)	◎	◎	◎			60%
小テスト	◎	◎				20%
発表				◎		20%

履修上の注意

科目名	聴覚障害の検査				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	実務家教員担当科目	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科(昼夜間)　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる聴覚検査の技能を習得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:　△	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
	○	○			純音聴力検査を模擬的に実施できる。
	○	○			語音聴力検査を模擬的に実施できる。
○	○				中耳と内耳の機能の検査が説明できる。
○	○				検査結果を解釈できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:原晃(監)「聴覚検査の実際　改定4版」南山堂、2019

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	純音聴力検査　気導聴力　上昇法	レポート①純音聴力検査の行い方をA4 用紙一枚にまとめる(30分)
2	純音聴力検査　骨導聴力　マスキング	検査の練習を行うこと(30分)
3	語音聴力検査	レポート②語音聴力検査の行い方をA4用紙一枚にまとめる(30分)
4	インピーダンスオージオメータ	検査の練習を行うこと(30分)
5	内耳機能検査	検査の練習を行うこと(30分)
6	聴覚検査演習	検査の練習を行うこと(30分)
7	検査結果の解釈	レポート③純音聴力検査以降、結果によって選択される検査をわかりやすくまとめる(30分)
8	実技試験	実技試験を振り返り、繰り返し練習をする(1時間)
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

(1)授業の中でレポートを3回実施する。 (2)定期試験(実技)を実施する。(3)授業時の質問や取り組み
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(実技)		◎	◎			70%
小テスト						
宿題・レポート		○		○		20%
質問・取り組み				○	○	10%

履修上の注意

科目名	成人聴覚障害の診断				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2020年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	聴覚障害に対する言語聴覚療法の評価診断および言語治療に関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形式	講義:　○	演習:　○	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○					成人聴覚障害の評価について概説することができる
○					補聴器、人工内耳の適応例を挙げることができる
○					評価サマリを作成することができる
○					模擬ケースカンファレンスにて模擬的に報告することができる
○					聴覚情報補償について説明できる

テキスト・教材 参考図書

教科書:藤田郁代(監)「標準言語聴覚障害学　聴覚障害学　第2版」医学書院2020

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	成人聴覚障害の評価概論	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
2	面接による評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
3	聴力検査の選択	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
4	包括的聴力評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
5	コミュニケーションの評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
6	心理社会的側面の評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
7	聴覚補償機器	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
8	補聴器・人工内耳の適応と評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
9	中枢性聴覚障害	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
10	機能性聴覚障害	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
11	情報補償	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
12	評価サマリの作成	評価サマリを作成する(1時間)
13	統合と分析、治療計画の作成	治療計画を作成する(1時間)
14	ケースカンファレンス	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
15	定期試験と振り返り	講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)

評価方法

(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト						
宿題・レポート				○		30%
発表・作品						

履修上の注意